

「テ形」による言いさしの文について

白 川 博 之

1. 「接続助詞」による言いさしの表現

日本語には、次のように、文を従属節のみで言います表現が、しばしば見られる。

- (1)「あんまりだわ!! 外泊するなら連絡してくれればいいのに。」

(めぞん①, p. 111)

- (2)「ねえ先生、この茶碗ヒビが入ってますけど…?」(美味②, p. 52)

- (3)「じゃ、ぼくは帰るから」(ララ)

- (4)筑紫「昭和40年生まれ?」

松任谷「ええ。大学一年生。言葉遣いも風俗も違う。36,7年の子たちとも全然違いますね。だからどうっていうんじゃないですけども、面白いですよ。珍しい動物を見ているような。恋愛の形態なんかもほんとうに違いますしね。」

(神々, p. 21)

「のに」、「けど」、「から」、「し」は、いわゆる「接続助詞」であって従属節を形成する助詞である。従属節である以上、ふつう、主節が後に続くわけだが、上の例の場合、それが無い。したがって、形式的には、文を途中で言いさした形となっている。

興味深いことは、言いさしの形なのに、日本語のネイティブ・スピーカーならば、その文の意味が理解できること、そして、その意味というのが、上の文のような文脈だけに限られず他の文脈においても引き出されるような、ほぼ固定した意味だということである。つまり、ネイティブ・スピーカーの直観では、上のような言いさしの文は、文として不完全だという感じが全くなく、その点では、言い切りの文と等価なのである。

このような直観は、辞書の記述の上にも反映している。多くの国語辞典では、上の文のような接続助詞の用法を「終助詞的」な用法、ないしは「終助詞」としての用法として、本来の接続助詞としての用法とは別の項目を立て、意味を記述している。それぞれの接続助詞について、その記述例を引用(関係箇所のみ)すると、次のような具合である。

- (5)のに：(終助詞) 予想に反した意外な気持や期待外れの不満を表わす。相手への恨み、非難・詰問に転ずることもある。「君も来ればよかったのに」(言泉)

- (6)けれども：(終助詞) あとを言いさしにしたような形で、えんきよくに述べる気持を表わす。「それはよく分かっているんですけれども」(新明解)

- (7)から：〔終助詞的に用いて〕相手に言いわたして、反応を求めるのに用いる。「ただではおかないから」(現代)

- (8)し：ふくみをもたせ、ひかえめに言う。「そうばかりは言ってはいられないしね」〔終助詞的な用法〕(現代)

このような使われ方をした場合の接続助詞を、終助詞として扱うべきなのか、それとも、あくまでも「終助詞的な」用法として終助詞とは一線を画すべきなのかは、興味深い問題である。しかし、その議論は、また別の機会に譲るとして、ここでは、ともかくも、「接続助詞は、しばしば、そこで言いさして終助詞的な(あるいは、終助詞としての)使い方をされる(ようだ)」という事実認識をすることのみに留めておく。

さて、そのような事実認識に立つと、次のような問題が浮かび上がってくる。

「テ」は、ふつう、接続助詞の一つに数えられている。しかも、「ナガラ」などと違って、動詞句だけでなく文(あるいは節)同士をも繋ぎ得る接続要素であり、その意味で、上に挙げた4つの接続助詞と同列に扱われるべきである。だとすると、当然、「テ」についても、上で見たような用法があっても不思議ではない、ということになるが、予想に反して、「テ」については、このような用法が取り沙汰されないという、注目すべき事実がある。早い話が、「テ」は、辞書において「終助詞」あるいは「接続助詞の終助詞的な用法」として認知されていないのである(「お願い。帰って。」のような命令的な用法については、取敢えず除外しておく。)

それでは、「テ」については、このような言いさ

しの用法がないのか、というところ、全くそうではない。
(9)「遅いじゃないか、海原雄山と帝都新聞側はもうとっくに来てるよ。」「すみません、成田まで蟹を取りに行ったら、渋滞に巻き込まれて。」
(美味、p. 168)

(10)「このマフラー、あったかくて あったかくて。」
(めぞん②p. 219)

(11)「あ、あの その節はお騒がせ しまして……」
(めぞん①、p. 199)

(12)「ぼくのためにこんなに真剣になって いただい
て。」(めぞん①、p. 79)

(13)「考え直させるどころか あおりやがって」(花、
p. 162)

このような「テ形」の使い方は、日常会話においてしばしば観察される、その意味では、「普通の」あるいは「慣用的な」使い方である。他の「接続助詞」の例にならってこのような「テ形」の表わす意味を記述するとすれば、それぞれ、①事情の説明、②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難、の意を表わしている、とでもなるうか。

問題の所在を整理すると、こうなる。同じく「接続助詞」扱いにしている、しかも、同じような言いさしの使い方があるのだから、「テ」についても終助詞的な用法というものを知るのが道理なのではないだろうか(「テ」は用言の「終止形」に付くわけではないので、どのみち「終助詞としての」用法とは言えないだろうが。)それとも、「テ」のこのような用法を辞書が継子扱いにしていることには、それなりに理由があるのだろうか。以下では、言いさしの表現をめぐる「テ」と他の接続助詞の異同について考察する。

2. 「テ」の「終助詞的」な用法

「言いさし」と言っても、次のような言いさしは、ここで問題にしているような終助詞的な用法の候補とは見なされない。

(14)刑事：いい加減に白状しないか？ A子ちゃんに声を掛けて、それでどうした？

被疑者：A子ちゃんに、「ドライブに行かないか？」と誘って……。

刑事：誘って、それで、どうした？

被疑者：無下に断られて、カッとなって殺しました。

(15)男：きょうは、久しぶりに、山陰グルメ・コー

スと行こうか？

女：あ、それ、いい！

男：「日本海」でお酒を飲んで魚を 食べて……。

女：「大黒屋」で蕎麦を食べる、と。

男：そうしよう。

これらの例では、ただ単に、後続を予定されている主節が何らかの事情で言わずじまいになっている。だから、その予定された主節が実現されない限り、文として不完全なままである。言い換えれば、いくらネイティブ・スピーカーと言えども、言いさしの箇所までを呈示して、結局、その発話で何が言われようとしていたのかと問われても、それを言い当てることは不可能である。いろいろ予測は立とうが、その内容は十人十色だろう。

「終助詞的」というからには、文がそこで中止しているだけでは駄目で、その先を言わなくても、意味がそこまでだけで完結している、ということが必要である。実質的に、言い切りの形と等価値である、といってもよい。

このような意味での終助詞的な「テ」の実例を、少し、詳しく見ていこう。前節では、終助詞的な「テ」の用法として、①事情の説明、②感嘆、③陳謝、④感謝、⑤非難、の5つの意味を表わすものを列挙したが、数多くの実例を収集して分類してみると、だいたいこの5つの用法に収斂するようである。それぞれについて、検討していこう。

①「事情の説明」

量的には、5つの用法の中でこの「事情の説明」の用法の用例が一番多く見つかる。

最も単純な分かりやすい用例は、次のようなものである。

(16)一の瀬：(ドアを開けて覗く)「なにやってんの、さっきから？」

響子：「あ、一の瀬さん。」

(二人で、酔いつぶれた朱美を運んでいく)

響子：「助かった。ひとりじゃ とても 運べな
くて。」

一の瀬：(朱美を覗きこんで)「ぐでんぐでんじゃないの。」

朱美：「だーって客のおごりだつーから、ボトル一本あげちゃったー。」

一の瀬：「客も災難だわ。」

(めぞん①、p. 177)

(17)A「あの子を家に入れるって——!？」

B「んー 浅山久央くんのご両親は海外を飛び回ってる音楽家で連絡がとれなくて。彼は一人暮らしだしケガが治るまではせてーね」

A「でもあの子ヘンなのよ」

(花とゆめ、p. 88)

(16)は、酔いつぶれた女性を一人で運ぼうとして難儀をしていたところに援助を得られたときの安堵の気持を述べたもの。「助かった」という直接的な安堵の気持の表明を受けて、いかに自分が困っていたか、その事情を説明することによって、安堵の実感を分析的に表現している。一見したところ、「助かった」という発言内容の理由を述べている、ありふれた「テ形」の用法に見えるが、次のように、従属節と主節の構文に言い換えられないことに注意。(16')*ひとりじゃとても運べなくて、助かった。

(16')が示すように、この言いさしの構文は、主節と従属節の倒置ということでは説明できない。

(17)は、Bが「浅山久央」を家に置くことに対してAが難色を示したことを受けて、Bが、自らの行為の釈明をしたものである。「テ形」の後に言い残されている気持ちを汲めば、「だから、自分がそのようなことをしたのは、仕方がないことだったのだ」という気持である。事情を説明して、自分の行為の正当性を主張しようとしたと解釈される。

次に挙げる(18)と(19)における「事情の説明」は、上の2例はほどは単純ではない。

(18)山岡：「ああ……。また胃が……。」「(イテテテ…と腹を押さえる)

栗田：(困ったな、という顔で)「……。」「

山岡「肝心の材料をなににするか、決まらないんだよ……。豚肉、鶏肉、牛肉、魚介類、野菜……。全部やってみたけど……。これとは思えるものが出来なくてね……。」「

(美味24、p. 163)

(19)吉行「『ムツゴロウ』というのは、例の九州の有明海にいるあのムツゴロウですか。」「

畑「だろうと思うんですがね。」「

吉行「『だろうと思う』って、人がつけたんですか。」「

畑「だいたい『毎日新聞社』が悪いんです。僕が『毎日グラフ』に『ムツゴロウの博物誌』という連載をはじめますときに、係の人が、僕の昔の仲間にあたりまして、僕のあだ名を収集したらしいんです。そのなかにたまたま

『ムツゴロウ』というのがありまして」

(吉行対談、p. 90)

(18)は、何の事情を説明したものか、強いて言ううとすれば、「自分が(胃が痛むほど)困っている」という事実であろう。しかし、その事実については明示的に表現されず、腹を押さえるなどの、非言語的な状況から察せられるのみである。心配そうな顔をする相手に対する発話(「肝心の」以下)は、単なる事実の報告に留まらず、相手が期待してであろう事情の説明の機能を果たしている。

(19)は、自分に「ムツゴロウ」という仇名が付けられた経緯を説明している。ここにおいても、自らの発言の中に「ムツゴロウという仇名を付けられた」という旨の明示的な表現はなく、また、相手の発言にも、「ムツゴロウという仇名は、どのような経緯で付けられたのですか」という旨の明示的な質問もない。経緯の説明に対する相手の期待を察しての発言だと思われる。主節はないが、もし無理に補うとすれば、

(20)「それで、ムツゴロウという仇名が付いたのです」

とでもなろうか。もちろん、これがなくても、十分に意味が通じ、そればかりか、ネイティブ・スピーカーであれば、その解釈以外の解釈の可能性は、おそらく、ないだろう。

②感嘆

(21)栗田：海原雄山が食べに来たですって!!

山岡：またイヤミを言ったのか!

カレー屋の妻：(感激醒めやらぬ顔つきで)その逆です、主人のポークカレーをととてもほめてくださって……

(美味24、p. 201)

(22)五代：(にこっと笑い掛けて)管理人さん、笑いましょう!!

響子：え？(と不思議には思いつつも、にこっと笑う)

五代：そうっ 笑顔が一番!!

響子：そ、そうですね。

(五代は、「まけるもんかーっ」と言いながら、トントントンと元気に二階に上がってゆく)

響子：(心の中で：無理に明るくふるまって…。やっぱりなにかあったんだ)

(めぞん①、p. 174)

「感嘆」という用語が最適かどうか、分からない

が、少なくとも、「感嘆」とでも言うしかないくらいに、感情の表現が未分化である。すなわち、話者は、「テ形」の節で描写されたコトの生起自体に、強く感ずるところがあって発話しているのだが、その感情を分析することはせずに、ただ感じ入っている状態にいることを表現している。感情の種類は、(21)は「感激」、(22)は「あきれ」とでもいうべきものであると読み取れるが、ここで大事なのは、話者自身は、その種類に分け入ってまで明示的に表現していないことである。

③陳謝

(23)響子：あ、あの その節はお騒がせしまして…

近所の奥さん：いーのよ いーのよ!!

(めぞん①、p.199)

(24) (家庭教師先で)

母親：郁子の母でございます。このたびは無理を申しまして。(と頭を下げる)

五代：いえいえとんでもない。

(めぞん①、p.168)

ネイティブ・スピーカーならば、これらが、陳謝を意図して発話されたものであることを即時に理解することができるだろう。それほど、日本語において陳謝という言語行動を遂行する際に好んで用いられる文型である。

ところが、興味深いことに、このような表現は、外国人学習者には、単なる言いさしの表現(→(14)、(15))にしか見えないことがあるようだ。試みに、中国人の留学生2人(彼らは、大学院入試にパスするほどの日本語能力の持主である)に聞いてみたところ、2人とも、これらの発話の意図を理解することができなかった。この、ネイティブ・スピーカーと外国人学習者とのギャップは、問題解決の方向を示唆しているようで、大変面白い。

④感謝

(25)五代：あの…。

響子：はい。

五代：ぼくのためにこんなに真剣になっていただいて。

響子：えっ!?

(めぞん①、p. 79)

(26)先日は、結構なものを頂戴しまして……。 (作例)

これらは、言語行動として見れば、「感謝」の意を表していると解釈できるが、言葉の文字通りの意味を考えると、相手が自分にしてくれたことを口に出してなぞっているに過ぎない。しかし、だからと言って、次のように言ったとしても、これだけでは感謝の表明という言語行動を行ったことにはならない。

(26')? 先日は、結構なものを頂戴しました。

したがって、「終止形」で言い切りにせず、「テ形」で言いさしにするという、文末形式の違いが、感謝の表明という言語行動の成立に、直接関わっていると考えるべきである。

参考までに、③で陳謝の意味が汲み取れなかった中国人留学生も、④のような例については、感謝の意味を正しく理解できたことを申し添えておく。

さて、相手のしたことを口に出してなぞる、しかも、文末は「テ形」で、という表現方法で遂行される言語行動には、「感謝」の他に、「非難」がある。

⑤非難

(27)「なんでだよー 去年の夏あたりからばったりやめちゃって。わけ言ってよ 諦められないやんかー」

(花とゆめ、p.284)

(28) (五代が二階の窓から飛び降りようとしている。四谷と朱美が、止めている)

五代：はなせーっ、飛びおりて死んでやるー!!

四谷：落ち着きなさいよ、五代くん。

朱美：模試に遅刻したくらいでなによ。

(一の瀬が、二階の他の窓から、この様子を見て)

一の瀬：どうせ飛びおりるならビルの屋上から飛ばんかい。同情ひこうと思って!!

(めぞん①、p. 22)

同じ「テ形」の言いさしの形が、「感謝」と「非難」という、正反対の言語行動に用いられるというのは、興味深い。

ここでも、「テ形」の替わりに次のような「終止形」の文末形式にすると、非難のニュアンスは出てこない。それどころか、聞き手の身からすれば、わかりきったことを報告されることになり、談話を成さない。

(27')? 去年の夏あたりからばったりやめちゃった。

(28')? 同情ひこうと思った。

このような考えにしたがって、さきほどの③「陳謝」を振り返ってみると、「テ形」で表された行為の行為者が話し手であるか聞き手であるかの違いがあるだけで、成立事情は④「感謝」、⑤「非難」と同じであることに気づく。すなわち、「陳謝」においては、申し訳なく思う、自分の行為自体をそのまま口に出して言うことが、陳謝という言語行動を遂行したことになるわけである。

また、③～⑤と②との間にも、共通点が見出せる。

②の「感嘆」の用法では、「テ形」の節で表された事柄に対して、「感嘆」としか言いようのない未分化の感情を抱いていることを表わす表現としたが、③～⑤では、感情の内容は比較的分化している。③・④では、申し訳なさ、ないしは、恐縮の気持で、⑤では、相手を責める気持である。しかし、よくよく考えてみると、そのような気持の分化は、特定の文脈において特定の相手に対して発せられたことにより汲み取れる（具体化できる）もので、そのような特定の要素が手掛りとしてなければ、「テ形」自体の表わすものは、②の「感嘆」の用法と同様に漠とした感情であることに変わりない。

逆に言えば、②の「感嘆」の用法の「テ形」も、文脈さえ用意されれば、「感謝」や「非難」の読みが出てくる。次のペアを比較されたい。

(29) 栗田：海原雄山が食べに来了ですって!!

山岡：またイヤミを言ったのか!

カレー屋の妻：（感激醒めやらぬ顔つきで）その逆です、主人のポークカレーをととてもほめてくださって……（＝(21)）

(29') 「まあ、梅原先生！ 先日は、主人のポークカレーをととてもほめてくださって……。おかげさまで、主人は、あれ以来、自信満々で店に出ています」

(30) 五代：（にこっと笑い掛けて）管理人さん、笑いましょう!!

響子：え？（と不思議には思いつつも、にこっと笑う）

五代：そうっ 笑顔が一番!!

響子：そ、そうですね。

（五代は、「まけるもんかーっ」と言いながら、トントントンと元気に二階に上がってゆく）

響子：（心の中で：無理に明るくふるまって…。やっぱりなにかあったんだ）

（＝(22)）

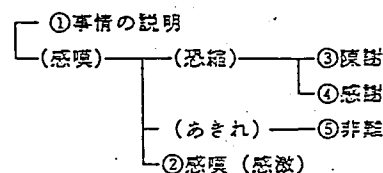
(30') 「一体、何なの、きのうの行動は？ 無理に

明るくふるまって。あんなことしなくてもいいじゃないの」

上の例が示すように、③～⑤は、言語行動の観点からすると、別個の項目を立てて分類することに意義があるかもしれないが、この構文の文字通りの意味から考えると、基本的には、すべて、②の「感嘆」の特殊な用法だと考えられる。

以上を踏まえて、言いさしの「テ形」の用法を分類・整理すると、次のようになる。

(31) 言いさしの「テ形」の用法



3. 言いさしの「テ形」の文脈依存性

前節では、「接統助詞」の「テ」の「終助詞的」な用法を実例に則して概観した。「テ」を「接統助詞」とする従来の分析は、かならずしも適当でないかもしれないが、従属節を形成する点において他の「接統助詞」と共通していることは確かなので、説明の便宜上、同列に扱った。

しかし、その「テ」による言いさしの表現について、他の「接統助詞」と同様の「終助詞的」な用法と認めていいかどうかについては、もう少し、慎重な検討が必要なようである。前節では、「それ以上言わなくても、意味が理解できるので、言いさしの形でも、不完全な感じを与えない」という事実を以て、そのような言いさしの「テ」の用法を、「終助詞的」な用法と判断したが、果たして、その基準は、適切だろうか。

ここで、あらためて、「終助詞的」である、ということの内実を吟味しておかなければならない。一般に「的」という言葉は曲者で、似て非なるものまで同類として一括りにしてしまう恐れがある。ある一定の基準を設けて、境界線を画定しなければ、問題の本質は浮き彫りに出来まい。

そこで、ある接統助詞の用法を終助詞的な（あるいは終助詞としての）用法と認知する統語的・意味的な基準を、次のように定める。

(32) a. 文末で使われる。

b. 文脈に依存しなくても、単独で、意図した意味を表わすことができる。

ここで重要なのは、aの統語的な条件だけを満たしていても、終助詞的と認められないことである。bの(意味的・統語的)条件は、たまたま文末に使われた疑似終助詞的な接続助詞を排除するために設けたものである。

冒頭の接続助詞の4例については、もちろん、上記の条件を満たしている。たとえば、(1)を例にとると、

(33) 外泊するなら連絡してくれればいいのに。

(= (1))

(a)の条件を満たしていることは自明だし、主節の潜在の可能性についても、補おうと思えば、「連絡してくれなかった」というような主節が想定できようが、それは、言語・非言語の文脈から当て推量で復元されるようなものではなく、この言いさしの形だけから自動的に導きだされるものである。したがって、(b)の条件も満たしている。こういう特別の接続助詞が、晴れて「終助詞的」と認知されるわけである。

それでは、前節で見た「テ形」の用法は、どうか。

(34) 「遅いじゃないか、海原雄山と帝都新聞側はもうとっくに来てるよ。」

「すみません、成田まで蟹を取りに行ったら、渋滞に巻き込まれて。」

(= (9))

これは、前節の分類でいくと、①「事情の説明」の用法である。(a)の条件はいいとして、(b)の条件は、満たしているだろうか。

文脈から分離して、この文だけを見ても、「事情の説明」という解釈は、出てこない。この解釈は、遅れて到着したことを非難する相手の言葉に対してなされた応答の発言という状況設定があって初めて可能になる解釈である。言いさしにしても不完全な感じを与えないのは、言われていない主節の内容に相当する「事情を説明すべき事実」(この場合、「遅れて到着したということ」)が、先行する文脈によって既に与えられているためである。この先行文脈がなければ、前節の(14)、(15)と同様の、単なる不完全な言いさしの文にすぎない。

それを構文的に捉えるならば、本来、従属節に後続すべき主節が、その内容を新たに言う必要が全くないために、省略されたのだと考えられる。省略された主節の内容は、先行文脈を探せばその中に求

められる。前節において、主節と従属節の倒置という考え方ができないことを述べたが、主節の省略という考え方は、「事情の説明」の用法の強い文脈依存性から考えて、妥当だと見なし得る。

「事情の説明」の用法は、その性質上、どんな場合でも、「事情を説明すべき事実」の存在を前提としている。したがって、少なくともこの用法の「テ形」については、「終助詞的」とは言いがたい。われわれが、似て非なるものを「終助詞的」な言いさしの候補として考えていたのは、「従属節だけで言いさしても意味が完結している」ということに目を奪われて、その意味の完結性が、先行文脈によって保証されているという事実気がつかなかったためだと言える。

それでは、それ以外の用法、すなわち、「感嘆」の用法と、その特殊なケースである「陳謝」や「感謝」・「批判」の用法はどうか。

(35) 「このマフラー、あったかくて あったかくて。」

(= (10))

(36) 「あ、あの その節はお騒がせしまして……」

(= (11))

(37) 「ぼくのためにこんなに真剣になっていただいで。」

(= (12))

(38) 「考え直させるどころかあおりやがって」

(= (13))

これらの文は、前後の文脈から切り離して単独で提示しても、それぞれの意味するところを解釈できる。その点で、文脈依存性の強い「事情の説明」の用法と異なり、「終助詞的」と認定してもよいような印象を与えるかもしれない。

しかし、このような文とても、実際に使われる文脈抜きにしては、個別の意味を導くことは出来ない。もっと言えば、上の文は、どのような文脈で使うのかということが、何らかの理由で(多くの場合、常識に照らしてみても)すぐに察しがつくので、文脈抜きにして提示されても、言わんとするところが理解できるのである。

一番わかりやすいのが、(38)の例である。「～やがる」という述語は、他人の行為を軽蔑的に言うときに使う待遇表現である。また、「考え直させるどころかあおった」という内容は、具体的な状況は察しがつかないにしろ、何か、望ましくない方向に行動を起こしたという印象を与えるものである。このような条件が揃えば、主節を省略しても、言わずに置かれた主節の内容は、

(39) a. 困ったやつだ。

b. 悪い男だ。

c. いい加減な人だ。

等々、復元しようとするれば、いろいろな言い方はできようが、いずれにしても、相手を非難するような内容であろうことは、容易に推測がつくだろう。

反対に、語彙的・内容的な手掛りのない、次のような文は、これだけでは、「非難」の意味を籠めて発話された文と解釈することは、むずかしいだろう。

(40) a. タクシーで行って。

b. 窓から手を振って。

というのも、「タクシーで行く」コト、「窓から手を振る」コトが、非難されるべきことだという含意が、この文だけでは、読み取れないからである。次のように、非難を匂わすような語句を付け加えれば、「非難」の読みも、可能になるかもしれない。

(40') a. 高くつくのに、タクシーで行って。

b. 駄目だと言ってるのに、窓から手を振って。

(40)と(40')との違いは、「テ形」による言いさしそれ自体には、「終助詞的」な意味がないことを示している。

このことは、(40)の文が実際の発話場面において「非難」の意味に解釈できない、ということの意味するわけではない。聞き手が発話時点で「タクシーで行く」という行為を完了している場合や、「窓から手を振る」という行為をしている場合(進行中・完了いずれでもよい)に、話し手が(40)をしかるべきイントネーションで発話した場合には、聞き手は、自分が非難されているということを容易に理解するだろう。この場合は、①話し手が自分のした行為について、何か言おうとしている、②話し手は責めるような口調で言っている、という場面的な要因の支援があるので、「非難」の解釈が引き出されるのである。したがって、「テ形」による言いさしという形式そのものに「非難」の意味があるわけではないことに変わりはない。

同じことが「陳謝」や「感謝」の用法についても言える。これらの用法においても、何らかの手掛りによって、「テ形」で表わされた内容が「陳謝」や「感謝」の対象となる行為として持ち出されていることが容易に理解されるのであって、「テ形」そのものに、「陳謝」や「感謝」の意味が籠められているのではない。

(41)「あ、あの その節はお騒がせしまして……」

(= (36))

(42)「ぼくのためにこんなに真剣になっていただいで。」

(= (37))

(41)を「陳謝」の表現と解釈できるのは、①「その節は」という改まった前置きの言葉、②「騒がせる」ということの常識的な意味合い、③「お～する」という待遇表現から解釈される動作の仕手と受け手、という諸々の手掛りがあるからである。また、(42)においても、「ぼくのために」や「いただいて」という言葉から、話しの受益意識がわかるので、容易に「感謝」の表現と理解できるのである。

少々厄介なのが、(43)のような一人ごとの「感嘆」の用法である。

(43)「このマフラー、あったかくて あったかくて。」

(= (35))

このような「感嘆」の用法は、「非難」「感謝」「陳謝」と異なって、対人的な発話行為ではないので、その発話の意図を認定することがむずかしい。対人的な発話行為の場合には、省略された主節の内容を発話の意図により比較的容易に言語化することができるが、「感嘆」の用法の場合は、先にも述べた通り、未分化な感情を表わしている。すなわち、「表現を意図された感情＝省略された主節の内容」という関係にはなっておらず、むしろ、意図された感情は、言いさしにされた従属節そのものに籠められているようである。

話をわかりやすくするためにあえて直観的な言い方をするならば、文字にして書き表わしたとき、「非難」「感謝」「陳謝」の用法の場合には、省略された主節を「……。」のごとく書き表わすのが、直観と符合する表記法だと思われるが、「感嘆」の用法の場合には、そのような表記法の必然性が比較的低いような感じがする。

それならば、省略された主節の存在を感じさせないこの用法こそが、本当の「終助詞的」用法として残るのかというと、そう単純には言えないところがある。

他の用法と同様に、この用法にも、影に省略された主節があるということは、次のように、本当の言い切りの文と比べてみたときの余情の違いを観察すれば、納得できる。

(44) a. このマフラー、あったかい (よ)。

b. このマフラー、あったかくて。

(45) a. 黒田先輩って、とってもやさしい (よ)。

b. 黒田先輩って、とってもやさしくって。
各組の a の文は、それぞれ、単に「あたたかい」コト、「やさしい」コトを断定的に報じているだけであるのにたいして、b の文は、さらに総合的な価値判断を暗示しているように受け取られる。その判断は、次のように主節を補うことによって言語化できるだろう。

(44') このマフラー、あったかくて、

気持がいい。
わたしは幸せだ。
好きだ。
いい。

(45') 黒田先輩って、とってもやさしくて、

すてきだ。
大すきだ。
いい。
わたしは幸せだ。

補った結果を見て言えることは、好悪・快不快といった、比較的未分化な感情表現を想定できることである。未分化ということは、取り立てて言語化するほど、情報価値はないと言ってもよい。従属節の部分さえ発話すれば、その文の発話意図が、好悪・快不快などの感情の表明であることがわかるので、主節を省略したものと考えられる（その際、実際の発話場面では、話し手の表情やイントネーションが解釈の手掛りとなることは、「非難」の意味の解釈の場合と同様である。）

このことは、「終助詞的」な用法の成立の可否に、従属節の意味内容が決定的に関わっていることを意味している。すなわち、文脈を顧慮せずとも「感嘆」の意味を読み取れるような「終助詞的」な用法は、従属節の内容が、常識から判断して、好悪・快不快などの感情を感嘆的に表現していると推測できるものに限って成立する、ということである。だから、次のような文は、これ単独では「感嘆」の意味に解釈しようがない。

(46) このお花、赤くって。

(47) あの人、靴下が白くって。

ただし、これととも、「非難」の場合と同様に、十分な文脈（発話するときの表情やイントネーションなども含む）さえ用意すれば、「感嘆」の意味に解釈することができる。したがって、いずれにしても、「感嘆」の用法の成立に与かっているのは、主節を省略しても言わんとする意味が通じるかかどうかという文脈依存の条件だということがわかる。

さて、この「感嘆」の用法で注目に値するのは、なぜ b のように言いさしにすると a の文になかった余情がでてくるのか、ということである。すなわち、上の b の文の持つ余情は、主節を発話しないことによって主節に相当する内容を表現しているというパラドックスによって支えられているのである。主節の内容は、言語化された場合には情報的に無価値であるが、従属節のみによる言いさしという構文的に不完全な表現を選択することによって、影の意味として暗示される。その影の意味が余情の正体である。言い換えれば、言いさしにしないで、言いきりの表現を選択したら（→(44a), (45a)）構文的な不完全さが解消することと引き替えに、このような余情も消えてしまう。

以上のように考えると、この「感嘆」の用法も、他の用法と同様に、主節の省略という、文脈依存の原理によって成り立っているものだということがわかる。依存する文脈が、文の内部（前件と後件の関係）に限定される局所的なものであるために、文脈に依存せずに出てくる意味のように見えるが、言語外の常識に支えられた省略表現なので、やはり、「終助詞的」な表現ということとはできない。

4. 言い終わりの一形式としての 言いさし（まとめ）

結論を言えば、「テ形」によって言いさした表現は、「終助詞的」に見えるが、実際は、「終助詞的」ではない。本来従属節に後続すべき主節の内容が文脈（言語的・非言語的のいずれをも含む）によって言わずとも分かる場合に、それを省略した表現だ、ということになる。したがって、「接続助詞」の「テ」に終助詞的な（あるいは終助詞としての）用法を認めない、国語辞典の記述は、言語事実を正しく伝えているわけだ。

この結論自体は、しごく当たり前のことで、文法の素人にも常識的に考えつく平凡な結論に見えるかもしれない。しかし、そう見えたとしたら、そうした考え方の背景には、文は活用語の終止形（＋終助詞）で終わるのがまっとうであり、一方、「テ形」は前件と後件とを結ぶ「接続助詞」として、文の終わりではなく文の途中に来るのがまっとうでふつうのありかたである、という固定観念があると思われる。すなわち、「テ形」による言いさしは、まっとうでない文の終わり方であるから、まっとうな文の構造に還元して説明するべきだという「常識」に囚

われていると思われる。

たとえば、そうした「常識」に立てば、

(48) また、こんなことをして！

という言いさしの文は、

(48') また、こんなことをして、駄目じゃないの。

というような完全な文から、主節部分を省略してできあがった文だ、ということになる。

しかし、このような考え方は、(48)と(48')の間にある、微妙だが確かに存在する意味の違いを無視している点で、賛成できない。(48')で復元した主節は、(48)の持つ影の意味の近似値には違いないが、影の意味を過不足なく言語化したものではない。「おおよそ、このような気持ちが籠められています」ということを言い表わしているにすぎない。その証拠に、試みに、(48)の後にはどんな言葉が続くでしょうか、と何人かの人に聞いてみれば、様々な表現の答が返ってくるだろう。それらのどれが正しいということはない。いろいろな表現によって言語化し得るような、ある程度の幅をもった混沌とした感情が、主節を省略することによって暗示されるのである。

わたくしが前節までの分析の中で、「もし、補うとしたら、次のような言葉が続く」という言い回しをしたり、いくつかの表現を並列的に列挙したりしたのは、そのような意図からのことである。一つの表現で言い切ってしまったら、幅のある解釈を許す混沌とした感情が瘦せたものになってしまう。

誤解のないように確認しておけば、わたくしは、主節が省略されている、という構文的な説明を否定しているわけではない。構文的な説明としては、確かに、主節が省略されているということに間違いはない。それどころか、ネイティブ・スピーカーが言いさしの表現形式から余情的な意味を解釈するという事実は、主節が省略されているという言語直観ぬきにしては、説明できないと考える。それは、前節の終わりで主張したとおりである。

重要なことは、ここでいう「省略」が、他の構文で見られる「省略」の現象といささか事情を異にするという事実である。それは、端的に言って、復元可能性 (recoverability) の有無と言ってよい。いわゆる「省略」というものは、次のようなものだろう。

(49) A : どこへ行くの？

B : ちょっと、そこまで φ。

(50) A : 晩ごはん、食べた？

B : うん、φ 食べた。

欠けているφの箇所には、一義的に一つの語句を復元することができる。「接続助詞」による言いさしの用法においても、次のような場合は、この「省略」と同類と見なしてよいだろう。

(51) しばらく外に出ていていただけませんか。床上ワックス掛けしますので φ。

これらと比較すると違いは歴然だと思われるが、「テ形」の言いさしと裏腹の関係にある、主節の「省略」は、復元可能性のない、言ってみれば、「気持の省略」なのである。だから、統語的に言えば、厳密な意味での「省略」ではないのかもしれない。

本稿では、一見「終助詞的」に見える「テ形」による言いさしが本当に「終助詞的」であるかどうかを検討することを通じて、いかにこの表現が文脈に依存したものであるかということを見てきた。真相は、文脈に依存した、その意味で不完全な表現であるのに、現象的には、言い切りの形式と等価の完結性を備えているように見えるところが、この「テ形」の言いさしの面白さである。

もっと言えば、この「テ形」の言いさしを、単なる「主節の省略」という機械的な処理で済ますことができないのは、この「テ形」が統語的に「終止形」とパラディグマティックな関係にあるからである。つまり、「終止形」に替わる文の言いおわりの形として「テ形」が選ばれている、という意識が、われわれにはある。このように考えると、問題は、日本語の文の言い終わりの形のバリエーションという、より広いパースペクティブの中で捉えられると思われる。

今を遡ること30年前、国立国語研究所(1960)は、文の認定をめぐる、次のような接続助詞による終止を「言いさしの省略」とは考えず、「文を構成している」と判断した。

(52) お勤めの方なんて、夜じゃなきゃ、いらっしやれないしねー。

(53) ないときはしょうがないけど。

そして、これらを一人前の文と認定する理由として、(54)① 陳述を負う述語が、すでにそこには存在するから。

② 社会習慣としての終止のかたちを、話しこたばでは、このへんまでひろげてよいものだと考えたため。

の2点を挙げている。【1】

また、最近では、神尾(1990)が、「情報のなわ張り理論」の立場から、

(55) a. 今日はこれで帰りますから。

b. 申し込みは昨日で締め切ったんですけど。

c. 奥さん、修理代大分掛かりますけど。

d. そんなことはないが。

のような文末表現を、「疑似直接形」と呼んだ。

「直接形」(「終止形」(+よ))では情報の独占のニュアンスが色濃く出てしまうので、「直接形そのものを避ける様な」表現として、日本人は、このような「疑似直接形」を好んで使う旨の指摘をしている。【2】

これらの研究は、接続助詞による言いさしの表現を、文の終止の仕方のバリエーションとして、「終止形」とパラディグマティックな関係で捉えている点で、本稿と考え方が同じである。

本稿で取り上げた表現は、形は言いさしの形式を取っていないが、意味・機能的には、独立した文と等価の表現と認められるものである。このような表現を一人前の文として認めるかどうか、という方向に考えを進めると、「文とは何か」という古い問題に行き当たってしまう。「文とは何か」という問題は、一般言語学的に見ても、難しくて、棚上げになっている状態だと思われるが、統語的に云々することには限界があっても(あるいは、無意味であっても)、意味・機能的に文相当の形式に着目して、その意味・用法を検討することは、構文論の可能性を拡げ、文章論・表現論との関係の可能性を探る試みとして、有意義な成果が期待できる。小論は、その方向に向けてのささやかな試みである。

【注】

1. 国立国語研究所 (1960)、p.61-63.

2. 神尾 (1990)、p.56-57.

参考文献

神尾昭雄. 1990.『情報のなわ張り理論』大修館書店.
国立国語研究所. 1960.『話しことばの文型(1)―対話資料による研究―』秀英出版.

(辞書類)

『国語大辞典 言泉』小学館. (「言泉」)

『新明解国語辞典 第四版』三省堂. (「新明解」)

『三省堂 現代国語辞典』三省堂. (「現代」)

例文出典

(めぞん①) 高橋留美子. 1982.『めぞん一刻 1』小学館.

(美味②) 雁屋哲・花咲アキラ. 1989.『美味しんぼ 20』小学館.

(ララ)『月刊 ララ』1990.4. 白泉社.

(神々) 筑紫哲也ほか. 1987.『若者たちの神々Ⅲ』新潮文庫.

(美味24) 雁屋哲・花咲アキラ. 1990.『美味しんぼ 24』小学館.

(めぞん②) 高橋留美子. 1982.『めぞん一刻 2』小学館.

(花)『花とゆめ』1990.7(3/20) 白泉社.

(吉行対談) 吉行淳之介. 1985.『躁鬱対談』角川文庫.